二〇二三年度　入学試験問題　帰国生

国　語

【注　意】

・試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
・問題は一ページから八ページまでです。
・解答はすべて解答用紙に記入してください。
・字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
・記号・句読点がある場合は字数に含（ふく）みます。
・解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。

洗足学園中学校

1 次の文章は、村上陽一郎『エリートと教養』（第一章「政治と教養」）の一節で、筆者が「人間は理性と教養が邪魔をしなければサルにも劣る」という考えを述べた後の箇所です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

「教養ある」[1]ということは、しばしば「知識豊かな」と同義と考えられがちですが、私は、それは事の本質ではないと思います。ごく日常的な場面に引き戻して考えれば、「教養がある」ことの意味の一つは、何事にも「慎みがある」ということなのではないでしょうか。[ア]ノホウズな欲望の発揮を慎むための原動力として教養を考えることは、間違っていないと私は考えます。そしてこの「慎み」は、宗教を[イ]キゲンとする道徳や、理性の厳しい作用の結果としての倫理とは少し違った、より広い次元での、欲望の抑制装置に付された名前であるように思われるのです。

「慎み」という日本語に最も相応しい英語は〈decency〉だと思います。英英辞典を引いてみましょう。ある辞典ではこうあります。

behaviour that is good, moral, and acceptable in society

もう一つの例を引きます。

the acceptable or expected ways of doing something in society

あえて直訳的な解釈を施せば、前者は、「社会において、良しとされ、道徳的であるとされ、あるいは許容できるとされる行為」となり、後者は「何事かをなすに当ってのやり方として、社会において、許容される、あるいは求められるもの」とでも言えばよいのでしょうか。どちらも「社会において」という限定副詞句がついていることが[ウ]ガンモクでしょう。

念のためにディーセンシーの語源を遡れば、ラテン語の〈decet〉あるいはその名詞形の〈decentia〉であります。その意味は「適している」「適っている」です。英語に入ったときに、「社会の掟に、★規範に、行動原理に、外れていない」という意味を備えたのでしょう。そうだとすると、「掟」には、無論、人間の★放恣な［(2)］としての道徳、あるいは倫理も当然入るでしょうが、それよりもはるかに広い社会的規範、よく「ノモス」という言葉が使われますが、そうしたものも含まれるでしょう。

したがって、「慎み」も、ある社会で生きていく際に求められる作法、行動習慣に適っていることと解釈することができます。そして、社会がどのような行動習慣を求めているか、を「弁えている」こと、それもたしかに知識の一部ですが、それが教養あることの、少なくとも一部を成している、ということができるでしょう。「弁えて」いなければ、その共同体のなかでは生きられない、つまりアウトサイダーであり、ストレンジャー（ラテン語で「外部の」を意味する〈extra〉に由来する語です）であり、更にはラテン語の〈alienus〉に発する「エイリアン」（alien＝異星人）でさえあることになります。それはまた「★疎外」（alienation〔英〕）された人でもありましょう。「人間」という日本語がいみじくも明確にしているように、ヒトは「人々の間」つまり「仲間」のなかで、少し気取って言えば「共同体」のなかで、もっと普通に言えば「社会」のなかで、初めて「人間」になれる、というのは厳然たる事実です。その仲間が積み重ねてきた行動習慣、行動様式に順応することが、まずは人間としての最低限の義務ということにもなります。その義務を果たすための準備を整えてくれるのが教養でもあります。知識の多いことが、教養があることとは別物だ、と私が強く主張する所以もここにあります。

［A］人間は、自分の属する共同体の行動習慣に常に従うわけではありません。そこから意図的に離反し、反抗する自由を与えられていると言えます。当然[3]共同体は、それを良しとはしません。イエスは、ユダヤ共同体の内的原理に反して行動したために、死をもって★贖わなければなりませんでした。多くの[4]革命家がそうした運命を辿っています。しかし、如何なる革命家でも、「人間仲間」としてこれをすべきである、これはすべきではない、これはした方がよい、これはしない方がよい、という区別立て一切を否定するものはいません。いずれ、その人物を中心に新しい共同体が生まれれば（生まれなければその革命は全くの無駄ということになりましょう）、そこにはそうした行動習慣が生まれます。

もう一度確認しておきます。「教養ある」とは、人間が仲間内で静穏に生きていくために弁えておくべき行動習慣（私はかつてそれを「規矩」という言葉で表現しました）を実践できることです。ただし、一つだけ条件があります。これまでの記述では、「教養ある」ことは完全に周囲の共同体か

らの受動的な状態のようにうけとられるかもしれません。しかし、通常共同体の行動習慣には広い幅があり、相当な許容度・自由度があります。人間は、そのなかで、どの範囲までを自分は守るか、それは自発的に決めなければなりません。完全にそこから離れようとする場合は、前述の「革命家」になりますが、いずれにしても、そこに、人間個人の自由度があり、「能動的」な働きがあります。規矩は、他がどうあろうと、自分はここまでを許容度とする、という強い意志によって裏付けられるものであります。と同時に、自分の定めた規矩とは異なった行動習慣に従っている仲間に対しても、彼らの自由度を認めるだけの「寛容さ」が強く求められます。そうでなければ、人間の社会は、ロボットの社会になってしまいます。教養について、私が何を考えているか、ということの中心的なところは、ここに述べた内容だと、お察し下さい。

(5)こうした点から派生する、教養についての大切な局面の一つを指摘しておきましょう。それはコミュニケーション能力ということです。当然のことながら、★カントが考えようとした、人間理性に★淵源する道徳の場合は、基本的に人間（ばかりでなく、理性を備えた存在ならば誰にでも、例えば異星人でも）すべてに★普遍・妥当な行動原理であり、行動に関する命令でありました。［B］、「慎み」あるいは「ディーセンシー」をめぐる議論では、普遍的な原理と全く無関係ではないにせよ、ある特定の社会（共同体）が積み上げてきた行動習慣であり、「掟」が問題になりました。そうしたものは、時間と空間の★関数である側面が強く、言い換えれば、時代と社会とによって、大幅に揺れ動く、という性格をもっています。そこに生まれる変動の幅は、歴史、あるいは文化という大きな言葉で表現されるものの関数であると同時に、一つの共同体の内部においてさえ、変動の幅は小さいとは言え、大人と子供、男と女、(エ)ツいている職業などなどの関数でもあります。そして、自分が属するそうした下位共同体のなかにも、特有の行動習慣があります。そうした他者の行動習慣を理解すること抜きに、他者とのコミュニケーションは成り立ちません。先ほど「寛容」という概念を持ち出した理由の一つはまさしくそこにあります。［C］、カントは、こうした「他者」の★入れ子構造を、法律の立場から、国内法、国際法、人類法、宇宙法とでも呼べるような概念で捉えようとしていました。

話を戻します。自らの規矩はしっかりと定め、守りながら、それ以外の規矩に従って行動する人々を理解するだけの自由度を、自らのなかに持ち続けること、これも「教養ある」ことの一つの局面であります。そして、それが少なくともある程度達成されていない限り、その意味での「他者」とのコミュニケーションも(オ)ダンゼツした状態にとどまらざるを得ません。［D］、「教養ある」ことの一つの結果は、どんな他者とも、意思の★疎通を（少なくともある程度の充分さをもって）行うことができる状態、と言ってもよいのでは、と考えています。

その点から、教養に関して、今までに全く触れてこなかった領域にも一言しておきたいと思います。それは日本の政治の世界の現状に関することです。

かつて★山崎正和さんは『社交する人間』という本のなかで、社交人としての政治家を論じています。山崎さんは、私がこれまでに述べてきたような意味での「教養」を、政治家に求めている、と私は思います。政治家は、付き合う相手が、政治家、官僚、財界人、そしてたまに選挙民のみという、恂に貧しい状況から抜け出さなければならない。そんなことを、私は山崎さんの書物から読み取りました。

今更、とも思いますが、逆に今こそ、「(6)政治家よ、★教養人たれ」というメッセージが大切になっているような気がいたします。

（村上陽一郎『エリートと教養　ポストコロナの日本考』）

★規範……判断や行為の基準や手本。
★放恣な……勝手気ままで、だらしのないこと。
★疎外……よそよそしくして近づけないこと。
★贖わなければ……罪の償いをしなければ、という意味。
★カント……ドイツの哲学者（一七二四～一八〇四）。
★淵源……物事の成り立つ始まり。
★普遍……すべてに共通して当てはまること。
★関数……ここでは、あることがらの変化に応じて決まる他のことがら、という意味。
★入れ子……同じ形で大きさの違うものを数個組み合わせ、順に重ねて入れられるようにしたもの。
★疎通……意見や意思などがよく通じること。
★山崎正和……評論家・劇作家（一九三四～二〇二〇）。
★教養人たれ……教養人であれ、という意味。

問一 ――(1)「『教養ある』ということは、しばしば『知識豊かな』と同義と考えられがちですが、私は、それは事の本質ではないと思います。」とありますが、筆者は「教養」をどういうものと定義していますか。「慎み」という言葉を用いずに二行以内で説明しなさい。

問二 [(2)] に入れる語を本文から七字で抜き出しなさい。（ふりがなは不要です。）

問三 ――(3)「共同体」、――(4)「革命家」とありますが、「共同体」と「革命家」について、筆者はどのように考えていますか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 革命家によって共同体の行動習慣が意図的に破壊されたとしても、革命家やその仲間たちの中で、それぞれの傾向や行動習慣に基づく規則を否定し合う動きは誰にも止めることなどできない。

イ 革命家によって共同体を打倒し終えた先には、古い行動習慣が残っているだけであるので、新しく作られた共同体では、もはや行動習慣をよりよくしていくために議論することはできない。

ウ 革命家によって革命が達成され、以前の共同体の行動習慣が根底から覆されたとしても、新しい共同体にふさわしい行動習慣が作られるため、共同体の行動習慣自体を否定することはできない。

エ 革命家によって新しい共同体を想定できたとしても、多くの場合、革命家は新しい共同体では生きられず、行動習慣は従来のまま生き延びていくため、行動習慣を一切否定することなどできない。

問四 ――(5)「こうした点から派生する、教養についての大切な局面の一つを指摘しておきましょう。それはコミュニケーション能力ということです。」とありますが、筆者がコミュニケーション能力を教養についての大切な局面の一つとして指摘するのはなぜですか。三行以内で説明しなさい。

問五 ――(6)「政治家よ、教養人たれ」とありますが、本文全体の内容に従って考えると、政治家はどのようにしていかなければならないのですか。「政治家は、…なければならない。」という形で、解答らんに合わせて説明しなさい。

問六 [A] ～ [D] に入れる言葉としてふさわしいものを、次のア～エの中から一つずつ選びなさい。（ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。）

ア 言い換えれば　**イ** しかし

ウ ちなみに　**エ** もちろん

問七 ――(ア)～(オ)のカタカナを漢字に直しなさい。

問八 次に示すものは、国語の授業で本文を読み終えたAさん～Dさんが述べた感想です。筆者の考えと**明らかに異なる**一人は誰ですか。ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア Aさん　私は、「ディーセンシー」という英語の「社会において求められ、許容されるものや行為」という意味から、私たちはまず社会の中で生きる人間としてあらゆることを考えて行かなければならないとわかりました。

イ Bさん　私は、気ままな欲望に従って生きるのが人間だとすると、「教養」はそうした人間の行いへの戒めとして働いていて、「寛容さ」を身につけるためには、他者を尊重する生き方を実践しなければならないとわかりました。

ウ Cさん　私は、共同体や社会の「行動習慣」は、時代の変化とともに変動するということを知り、あらためて私たちは自分の生きている時代や共同体を見つめ直し、他者との交流を積極的にしていくべきだとわかりました。

エ Dさん　私は、「他者とのコミュニケーション」で大切なのは、何よりも人々の行動習慣には共通点があり、その「能動性」に常に着目して人間の理性を信じ、今後も「教養ある」他者との対話を続けることだとわかりました。

2 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

図書委員の代わりとして図書室係となった百瀬は、ある日、カウンターの掃除をしているときに『飛ぶ教室』を発見する。書架に戻そうと持っていくと、そこにはすでに同じ本が置かれていた。

わたしは本を［A］めくってみた。書架にあったほうは特に変なところはない。次に、カウンターの隙間から出てきた本も同じようにめくる。真ん中くらいまできたところで、白っぽい紙切れがはらりと落ちてきた。

あわてて拾いあげてみると、ルーズリーフの切れ端だ。誰かの直筆らしき文字が残されている。

方舟はいらない
大きな腕白ども　土ダンをぶっつぶせ！

ひと目見て、もしかして暗号？　と血が沸いたのは、さっき朔太朗とのあいだにシャーロック・ホームズの話題が出たせいかもしれない。文章全体の意味はわからないものの、〝土ダンをぶっつぶせ〟という少々乱暴で直接的な言葉が、土ダンはもちろん体育祭全体にまったく関われないわたしの鬱憤を晴らしてくれた。(1)どうせ、どうせ、といじけがちな心に熱い芯を入れてもらった気がした。

「これが暗号なら、解いてみたい」

「何？　百瀬さん、何か言った？」

わたしのつぶやきを拾ったらしく、間髪を容れずに声がする。振り向くと、窓際で朔太朗が箒を持ったまま★怪訝な顔をしていた。彼がさっき見せた細やかな観察眼を思い出し、わたしは協力を求めることにする。「これこれ」とメモの切れ端を［B］振って、自分のもとまで呼び寄せた。

忠犬か？　ってくらい一心に走ってきてくれた朔太朗は、わたしの差しだした切れ端を手に取り、じっと見下ろしている。ずいぶん念入りに見てるなと思っていたら、急に顔をあげた。［C］と音がしそうなまばたきをして、つぶらな目でわたしを見つめる。

「これ、どうしたの？」

よくぞ聞いてくれました、とわたしはここまでの★経緯をなるべく手短に説明した。

「それで、ベテラン図書委員さんに聞きたいんだけど。こっちの『飛ぶ教室』を借りてた人って、特定できない？」

「えっ」

「(2)きっとその人の暗号メモだと思うんだよ、これは」

「暗号って――」

朔太朗のしらけた表情を無視して、わたしはつづける。

「〝土ダン〟が土曜のダンスだとしたら、体育祭にまつわる暗号でしょ。週末の本番までに返してあげないと。ついでに意味も聞きたいし」

「本人に〝あなたのメモを勝手に読みました〟って宣言する気？　無理だよ、百瀬さん」

今の世の中にはプライバシー保護ってものがあって、としたり顔で解説をはじめた朔太朗の肩を、わたしは摑んで揺さぶった。鉢の大きな頭が［D］揺れてつむじが見える。

「だって気になるんだよ。〝方舟〟って何？　〝大きな腕白ども〟って誰？　〝土ダンをぶっつぶせ〟ってどういうこと？　完全に謎じゃん。謎は、気づいた者に解かれるのを待ってるんじゃないの？」

「あのさ、さっきから〝暗号〟とか〝謎〟とか――推理小説の読みすぎだよって言うほど本を読んでるわけでもないのに、百瀬さんは何でそんなに食いついてるわけ？　探偵ごっこでもするつもり？」

そう言って、朔太朗はわたしを睨んだ。つぶらな目が三角になったところで、全然怖くない。わたしは胸をそらし、挑戦的にうなずいた。

「そうだよ。だって体育祭からハブられた私が今参加できるのって、探偵ごっこくらいだもん」

朔太朗の喉がグゥと鳴る。しばらくわたしと睨み合ったあと、朔太朗は狭い肩を下げて息を吐いた。

「言っとくけど、推理小説でうっかり謎に突っ込んでいく素人は、たいてい殺される運命だから」

「シャーロック・ホームズみたいに協力的な相棒のいる名探偵なら、死なずに謎を解けるよね」

「シャーロック――」

呆れを通り越して、おののいている朔太朗の前で、わたしは二冊の『飛ぶ教室』を左右の手に持って掲げる。
「データ上は一冊しかない蔵書が、二冊出てきたことも気にならない？」
「――新着図書を登録したときの手違いでしょう。データを打ち込むのは人間だし、人間はたびたび間違う生き物だ」
もっともなことをもっともな顔で言うから、憎らしいビーバーだ。相棒失格だ。わたしは舌打ちして、朔太朗から切れ端のメモを奪う。元の本に挟むと、二冊の『飛ぶ教室』を重ねて抱え、(3)きびすを返した。本当は走りたいところだけど、そしてわたしの全力疾走はきっと朔太朗より速いんだろうけど、今は無理。左足を大事にゆっくり歩きだす。朔太朗に追いつかれる前にと、カウンターの後ろ、ブラインドのおりた★はめ殺し窓に向かって、大声で叫んだ。
「伊吹さん！　伊吹さん！」
「わ、バカ、バカ。伊吹さんまで巻き込むな」
おおいにあわてふためく朔太朗の声も自然と大きくなった結果、わたしがカウンターに辿り着く前に準備室のドアがひらき、伊吹さんがまん丸眼鏡の縁に手を添えて出てきた。
「いったい何事？　どうかしましたか？」
「伊吹さん！　学校の図書室は、同じ本を二冊注文することなんてあるんですか？」
同じ文庫本を左右の手に一冊ずつ持ったわたしの質問返しに、伊吹さんの目がすっと細くなる。
「流行りの大ベストセラーで、みんなが読みたがれば、五冊仕入れることもありますよ」
「『飛ぶ教室』は？」
わたしの勢いに気圧されたように、伊吹さんは首を横に振った。パーマヘアがわさわさ揺れる。
「往年の名作は、基本的に一冊ずつしか入れてないと思います」
「でも、現に二冊あります。どちらも野亜高のバーコードラベル付き」
わたしは裏表紙が見えるように、手の中の文庫本を二冊ともひっくり返す。伊吹さんは前へ出て、二冊の文庫本をしげしげと見比べた。「『飛ぶ教室』――が二冊」とつぶやき、頬に影を落として何やら考え込んでいる。まん丸な顔は影が落ちてもまん丸のままだった。

「ところで、カウンターの上って頻繁に掃除するんですか？」
「今日みたいな感じだよ。一日の最後に図書当番の委員が拭き掃除してる。カウンターに限らず図書室の本格的な大掃除は、各長期休みの前に図書委員全員でする」
考え込んでいる伊吹さんに代わって、朔太朗が答えた。わたしは伊吹さんにも注目してもらえるよう、メモの挟んであるほうの『飛ぶ教室』を高々と掲げる。
「こっちの本は、カウンターに置かれてたんです。そこのトレイの段差に挟まってたので、わざわざトレイを持ち上げて、しっかり掃除するまで気づきませんでした」
伊吹さんと朔太朗の視線が本に集まっていることを確認してから、わたしはゆっくり言う。
「夏休み前の大掃除なら、きっとトレイも動かして拭き掃除したと思うので――誰かが本をこっそり置いていったのは、大掃除後から昨日の日曜日までのあいだですね」
「なぜ、こっそり置いていく必要があるんですか？」
伊吹さんの問いに、わたしは本棚にもう一冊の『飛ぶ教室』を見つけたときから浮かんでいた仮説を打ち明けた。
「その返却主は、二冊ある同じ本の一冊が本棚にあり、データ上でも在架となっていることを知ってたんじゃないでしょうか。だから、正式な返却手続きをとるとエラーが出ることも予想できた。エラーが出れば、図書委員や司書さんが不審に思って、どういうことなのか調べますよね。二冊あることがバレますよね。返却主にとって、それはとても都合の悪いことだった――とか」
一気に喋って、わたしは悦に入る。どうよ？　こういうの、推理って言うんじゃないの？　『赤毛連盟』を読んでおいてよかった。重ね重ねありがとう、シャーロック・ホームズ。
(4)わたしの謝辞を遮るように、朔太朗が「どうして都合が悪いの？」と冷静に問いかけてくる。
「え？　そこまでは――あ、自分が返却した本について、あれこれ調べられるのが嫌だったんじゃない？　何かとんでもないいわく付きの本だから――とか」
我ながら適当すぎると思ったけれど、伊吹さんと朔太朗は何も言い返し

てこなかった。
伊吹さんがまん丸い顔に真面目な表情を浮かべて、ふくふくした手を差しだしてくる。
「百瀬さん。その本、二冊とも預かっていいかしら。準備室のパソコンで貸出データを確認し、どういうことなのか調べたうえ、しかるべき手続きをしておきます」
え、とわたしは一気に鼻白む。引退試合も夏休みも体育祭も奪われたうえに、目の前に降ってきた謎を解く楽しみまで奪われるのか？　そんなのあんまりだと心が叫び、体が熱くなる。
「誰がこの本を借りていたのか、パソコンで調べるってことですか？　だったら、わたしもいっしょに調べたいんですけど」
「――いっしょに調べて、どうするんです？」
(5)伊吹さんの口調が質問というより詰問になった。朔太朗が後ろからわたしのポロシャツをこっそり引っ張るのがわかったが、かまわず一歩前に出る。
「返却主にちょっと聞きたいことがあって」
「無理ですね。プライバシーは保護されています。学校司書であっても、そこには立ち入れません」
にべもない返事だ。後ろの朔太朗が「ほらね」とつぶやいたが、わたしは食い下がった。
「でも、コンピュータ上に記録は残ってるんですよね？」
「一応は」と伊吹さんはまん丸な顔を曇らせて息をつき、わたしをまっすぐ見つめてくる。
「でもね、百瀬さん。たとえばついさっき返却された本の中に、一万円札が挟まっていたとしましょう。それを見つけた司書や図書委員が、まだそのへんを歩いている返却した生徒を追いかけていって〝これ、あなたの一万円札ですよね〟って聞くことも、原則として禁止なんです。個人のプライバシーというのは、それくらい厳格に保護されているのよ」
例まで挙げて丁寧に説明してくれた伊吹さんの手に、わたしはだまって本棚に残っていたほうの一冊をのせた。そして、わたしの後ろでずっとやきもきしていた朔太朗に、メモの挟まっているほうを手渡す。
「何？」と朔太朗と伊吹さんの声がかぶる。
わたしは朔太朗の持った本を指さし、「この本を借ります」と宣言した。

「だから貸出期間の二週間は、わたしの手元に置かせてもらいます。あ、できれば体育祭までの一週間で返したいと思ってますけど」
図書室の中がしずまりかえる。外ではあいかわらず浮かれた声が賑やかに響いていたが、わたしはもう気にならなかった。
しずけさを破ったのは、朔太朗だ。
「こういうことするの、百瀬さんにとって何の意味があるわけ？」
「意味？　そんなの今はわかんない。あとからわかるかもしれないし、最後までわからないままかも。でもさ、そもそも意味ってなくちゃダメなの？」
わたしの質問に答える代わりに、朔太朗は上履きで床をこするような歩き方でカウンターのなかに入る。パソコンを操作し、わたしに学生証を提示させ、貸出手続きを取ってくれる。伊吹さんは身じろぎもせず、その様を眺めていた。
朔太朗は操作を終えると、学生証といっしょに『飛ぶ教室』をわたしの手に戻してくれる。
「これで野亜高図書室の『飛ぶ教室』は貸出中となってます」
(6)そう言うと、伊吹さんに向かって深々と頭をさげた。それが本当に申しわけなさそうだったから、わたしもあわてて倣う。
伊吹さんは無言のまま肩をすくめた。そして、自分の手に残った『飛ぶ教室』を見下ろし、準備室に戻る。ドアをあけ、背中を向けたまま声をあげた。
「図書当番おつかれさま。気をつけて帰りなさい」
（名取佐和子『図書室のはこぶね』）

★怪訝な……納得がいかない。
★経緯……いきさつ。
★はめ殺しの窓……備え付けで開くことができない明かりとりの窓。

問一

――(1)「どうせ、どうせ、といじけがちな心に熱い芯をいれてもらった気がした。」とありますが、この時の百瀬の気持ちを説明したものとしてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 体育祭に参加することを拒絶された百瀬にとって、「土ダンをぶっつぶせ！」という強い言葉は自分の気持ちを代弁するものであり、大いに共感をしている。

イ 体育祭という行事が嫌いな百瀬にとって、紙切れに書かれていたことばは自分の思いと全く共通するものであり、一目で理解ができるものとして納得している。

ウ 体育祭に参加することができない百瀬にとって、紙切れに書かれていた内容はその未練がましい気持ちを解消する際の心の支えになると感じている。

エ 体育祭に参加することに興味がない百瀬にとって、この行事に対して非難する言葉が書かれた紙切れは自分の気持ちを代弁してくれているように感じている。

問二

――(2)「きっとその人の暗号メモだと思うんだよ、これは」とありますが、百瀬はこのメモに対して何をしたいと考えているのですか。解答らんに二行以内で説明しなさい。

問三

(一) ――(3)「きびすを返した。」とありますが、この意味を八字以内で説明しなさい。

(二) ――(3)「きびすを返した。」とありますが、足に関することばを使った次の一～四の成句の意味を、後の［意味］ア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

一 膝をうつ
二 すねをかじる
三 あがく
四 弁慶の泣き所

［意味］

ア 余計な出費をする
イ 悪い状態から抜け出そうともがく
ウ 力を持っている者の弱点
エ 急に思いつく
オ 親や他人に養ってもらう
カ 演劇などの見せ場

問四

――(4)「わたしの謝辞を遮るように、朔太朗が『どうして都合が悪いの？』と冷静に問いかけてくる。」とありますが、それはなぜですか。解答らんに三行以内で説明しなさい。

問五

――(5)「伊吹さんの口調が質問というより詰問になった。」とありますが、本文全体の中で伊吹はどのような人物として描かれていますか。解答らんに三行以内で説明しなさい。文末は「人物。」にしなさい。

問六 ――(6)「そう言うと、伊吹さんに向かって深々と頭をさげた。」とありますが、この行動にはどのような意味があると考えられますか。これを説明したものとしてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 伊吹が説明したことはすべて間違っておらず、百瀬がやろうとしていることはおかしいのだが、自分が百瀬の素直な気持ちにこたえて行動したことをあやまる意味。

イ 伊吹が百瀬に対して怒りを感じていることは察しているが、ここは百瀬の一途な思いを尊重してしばらくの間、怒りを収めてほしいと願う気持ちをつたえる意味。

ウ 伊吹が図書室のルールに厳格であり、それを厳密に守ることを大切にしていることは分かっているが、百瀬にとっては緊急事態であり例外を認めてほしい気持ちを伝える意味。

エ 伊吹は図書室だけではなく社会全体のルールを百瀬に説明したが、それよりも百瀬の強い感情に従ったほうが結局は正しい結果になるのではないかと考えたことを示す意味。

問七 A ～ D に当てはまる語を次のア～クの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。（ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。）

ア ぐらぐら　イ ひくひく　ウ ひらひら　エ しとしと

オ ぐつぐつ　カ ぱらぱら　キ ぱんぱん　ク ぱちぱち

問八 次に示すのは、本文についてのA～Dさんの感想です。この中で、明らかに本文の内容や特徴と**合わない**感想を述べている一人は誰ですか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア Aさん　図書室というほとんど動きがない場所でも、ちょっとしたことから事件は起きることがうまく書かれていると思いました。

イ Bさん　登場する三人の人物の性格がはっきりと書き分けられているので話の内容が分かりやすく感じます。

ウ Cさん　一途な性格でとても活発な伊吹さんの気持ちが刻々と変わっていく様子が客観的に書かれています。

エ Dさん　図書室の外のにぎやかな様子を描写することによって、逆に室内の静かさが強調されていると思います。